

なぜ彼女らは自らを傷つける行為を行なうのか

エチオピア西南部牧畜民ホールにおける国家との交渉と女子「割礼」

宮 脇 幸 生

1 女子「割礼」について

女子割礼／女性性器切除（以下、女子「割礼」と表記）は、北東アフリカから西アフリカ一帯にかけて伝統的に行なわれてきた、女性性器に対する身体加工である。近年この慣習のあり方をめぐって、激しい議論が起きている。「価値普遍主義」と呼ばれる立場は、女子「割礼」を女性の人権に対する侵害だとみなし、この慣習の廃絶を求める。それに対して「文化相対主義」と呼ばれる立場は、この慣習が地域の伝統に根づくものであるとし、西欧的な価値観にもとづく性急な介入をいましめる。

本稿は、エチオピア西南部の農牧民ホール（Hor）の事例にもとづき、なぜ女子「割礼」という慣習が存続するのかについて考察する。従来人類学では、慣習の存続を、象徴的意味や社会的な機能に関連づけて説明してきた。しかし私は、この慣習の意味を、国家との関係におけるエスニック・アイデンティティの維持の点から考えたいと思

う。伝統的な価値とグローバルな価値がさまざまなエージェントによって体现され、せめぎあっている今日の世界にあっては、伝統的な慣習の存続や変化のあり方も、こうした交渉のプロセスにおいて解釈されるべきである。そしてこのようなプロセスこそ、「価値普遍主義」的立場も、「文化相対主義」的立場も、見逃してきたものだからである。

はじめに、ホールの女子「割礼」の現状について報告し、その儀礼的意味と社会的意味について明らかにする。次いで、女子「割礼」がエスニック・アイデンティティにとってもつ意味について、考察する。最後にこの数十年のうちにホールに広まった憑依カルトについて触れ、女性にとってのエスニック・アイデンティティとジェンダー・アイデンティティのはらむ矛盾について言及し、女子「割礼」の問題は、ジェンダーとエスニシティ、伝統と近代化といった、複雑な場に成立する問題であることを、示唆したい。

2 ホールの女子「割礼」

1. 割礼のプロセス

ホールは、エチオピア西南部のケニア国境付近に居住する、人口およそ3000人弱のクシ系農牧民である。牧畜と、河川沿いでの氾濫原農耕を行なっている。政治的に自律した四つの集落に分かれており、それぞれの集落には儀礼首長、政治首長、長老集団があり、儀礼をつかさどったり、トラブルを調停したりしている。

ホールには10あまりの父系クランがあり、これらが外婚の単位をなしている。とくに以前婚姻関係のあったクランは、「互いに血が甘い」といい、通婚すると多産が保証されているといわれる。女性たちは、婚資である未經産牛と引き換えに、これらのクラン間を婚姻によって移動するのである。ホールでは女子「割礼」は、結婚のときに行なわれる。女性の結婚年齢は、10代後半から、遅いときは30代になることもある。

ホールの婚姻の儀礼は、5日にわたる盛大なもので、その間に多くの家畜が屠殺され、蜂蜜酒が消費される。割礼は、この5日目のクライマックス、花嫁が花婿の家に移動する直前に行なわれる。

昼過ぎに、花嫁の家に、花嫁側のクランの成人女性たちと、花婿側のクランの成人女性たちがやって来る。花嫁は家の中で、少女時代の服を脱ぎ、彼女たちを待っている。割礼を行なうのは、この技術に習熟した老女である。花嫁は家の前室で裸になり、丸太をくりぬいた長細い桶にまたがる。自分のクランと花婿側のクランの女性たちが見守る中で、麻酔を用いずに、ナイフで外陰部をすべて切除されるのである。

その後花嫁は白い布に包まれて、花婿の家に花婿の友人たちの手によって連れて行かれる。そし

てそこで呪薬を飲み、花婿のクランの一員となる。

花嫁は傷が癒えるまで膝を紐で縛られる。そして特定の木の煙で傷をいぶして癒す。その後傷が癒えると、花婿と花嫁は新たな家を作り、そこで初めて床をともにする。

2. 通過儀礼

ホールの女子「割礼」は、陰部封鎖こそないものの、かなり過酷なものである。傷が癒着し、出産時には切開する必要がある。しかしホールの女性たちに割礼をどのようなものかと問うと、まず間違いなく、それはよきものであり、われわれの「伝統」(aada)である、と答える。割礼が充分でなく、陰部が切除され残されていることは、女性にとって大変恥ずかしいことであると言う。

割礼を受けるということは、一人前の女性になるということだ、と女性たちは言う。割礼は女性が少女から成人女性へと移行するための重要な儀礼であるというのである。

割礼をめぐるシンボルは、こうした地位の移行を、象徴的な死と再生に結びつけている。花嫁側の家で割礼されることは、そこで死ぬことであると言われる。そしてその後花嫁がくるまれる白い布には、死者を埋葬するときに用いる布が用いられる。さらに花嫁が花婿の家に連れて行かれて、そこで飲む呪薬は、男性の新生児が生まれてすぐにクランの帰属を確定するために飲むものと同じものである。つまり、生まれた家で少女として死に、嫁ぎ先でそこに帰属する女性として再生するという意味が、明確に示されるのである。

3. クランに帰属するという意味

少女から一人前の女性へ移行するということは、女性がホール社会の中で安定した地位を得るための唯一の方法となっている。女性の安定した地位

は、彼女が嫁ぎ先のクランに帰属することによって初めて可能となるのである。

ホールの男性が人生で最も重要であると考えていることは、自分の子孫を残すということである。子供を残さずに死ぬということは、もっとも忌まわしいことのひとつだと考えられている。とくに男の子供がいるということは、父から受け継いだ家畜を継承し、自分の父の名を名乗るものがいるということだと言う。家畜を継承する嫡子は、ホールではしかし、必ずしも実の子である必要はない。結婚した女性、すなわち家畜と交換にめとった女性が産んだ子供なら、たとえ不倫の子供であっても、夫の子であるとみなされるのである。また、夫の死後、その弟、あるいは妻の愛人によって生まれた子供であっても、その子供は夫の子供となる。

婚姻によって特定の親族集団に帰属するということは、女性にとってもとても重要である。いったん夫の親族集団に属したなら、例えば夫が死んでも、彼女はその親族集団によって保護されることになる。さらに彼女は、夫の所属する世代階梯に入り、儀式でも重要な立場を占めるようになる。

女性の新たな親族集団への帰属を印すのが、割礼である。若い男女が駆け落ちした場合、駆け落ち先で割礼されていたら、追手はあきらめるしかない。割礼により、彼女は駆け落ち先に帰属したことになるからだ。

割礼を受けるということは、女性が自らのジェンダー・アイデンティティを確立し、親族集団の中で自らの権威と支配権を確立するための出発点となるのである。彼女は、花嫁として交換される立場から、母親として自分の娘を交換する立場に立つことになるのだ。

3 国家との交渉

割礼は、ホールのエスニック・アイデンティティとも密接に関連している。割礼を行なうことは、ホールの女性のアイデンティティの一部であり、近隣のハマルやツァマコの女性を、割礼を行わないという理由で揶揄する。

割礼を行なうことが、特定の親族集団に帰属し、そこでの集団の再生産に寄与することだとすれば、割礼を行なわないということは、どこにも帰属しない女性という、ホールにとっては許容しがたい存在を意味することにもなる。しかしそのようなイメージを喚起するのは、近隣の割礼を行なわない牧畜民の女性ではない。彼女たちはいずれにせよ、家畜と交換に特定クランに帰属する。むしろ、こうした忌まわしいイメージを喚起するのは、彼らの忌み嫌う高地人の女性である。そしてこれこそが、女子「割礼」を存続させる大きな要因となっているのではないかと私は考えている。

高地人のことをホールはシダーマ (Sidaama) と呼ぶ。しかしシダーマは特定の民族をさす言葉ではない。高地から来て、ホールに対して何らかの意味で権力を振るう人間たちを、ホールはシダーマと呼ぶのである。だから政府の行政官、医師、教員、そして NGO の職員たちも、すべてシダーマのカテゴリーに入れられる。

ホールはシダーマを忌み嫌う。シダーマは、この国に銃をもたらした者たちであり、戦争を蔓延させた者たちである。そしてホールを搾取し、あたかも動物を扱うように虐待した者たちである。強欲で、常に貢納を求める者たちである。だからシダーマは敵である、そうホールは語るのである。しかし、シダーマは、ホールの近隣の伝統的な敵対民族とは、異なっている。シダーマは圧倒的に

強力であり、ホールはまったく歯が立たないのである。このようなシダーマとの関係は、ホールのエスニック・アイデンティティの定義に大きな影を落としている。

ホールと高地人の最初の遭遇は、19世紀末のことだった。イギリスの植民地主義的拡大と軌を同じくし、西南部に領土を拡張していたエチオピア帝国は、1897年にホールのテリトリーに侵入した。ホールは武力抵抗をした末に打ち破られ、略奪を受け、20年以上にもわたって周辺に離散した。そしてエチオピア帝国に税と貢納を払うことを条件に、テリトリーに戻ることを許された。

しかしその後、ホールの社会で実質的に権力を握り、支配を行なったのは、伝統的な首長ではなく、帝国との間をとりもつ土着の仲介者たちだった。彼らは帝国の力を背景に、自らの親族や取り巻きとともに、ホールで圧倒的な力をふるったのである。

ホールの人々の、仲介者に対する態度は、アンビバレントなものだった。強力な仲介者は、高地人と強い絆を作ることのできた者たちである。ホールの人々は彼らを、「シダーマの毒を飲んだ者」とよび、恐れ、嫌悪した。そしてホールは、仲介者の支配する政治的領域と、首長の主宰する儀礼的な領域を慎重に区別したのである。伝統こそホールの生き方を正当化するものであり、それはシダーマの法(hig)の世界と隔離されるべきものとみなされた。しかしまた支配民族との絆は、今やホールの最も強力な権力の源だった。そしてそれを独占しようとしたのは、ほかならぬ首長のクランだったのである。ホールはこの外部の力をどのように自らに取り入れ、かつエスニック・アイデンティティを維持するかについて、今に至るジレンマに直面することになる。

1974年に社会主義革命は、ホールと高地人の関

係を変えた。帝国の支配が、土着の支配層に依存する間接的なものであったのに対して、社会主義政権の支配は、より直接的だったからである。社会主義政権は衣服や銃など、潤沢な物資を人々に与え、彼らをペザント・アソシエーションに組織し、学校教育を受けさせ、地方都市の近くの軍事施設で軍事訓練を施した。多くのホールが、こうした訓練に参加した。他方で社会主義政権は儀礼首長を捕らえ、その儀礼用具を破棄した。ホールはおおむねこうした処置に、表立った反抗をせずに従った。伝統的世界は、急速にその境界を失うように見えた。しかし彼らは、こうした急激な変化に対して、抵抗の拠点を残しておくのを忘れたのである。それが女性の交換にもとづく家父長制的な社会構造だった。

このことは、女性の初等教育への抵抗に見ることができる。社会主義政権時代の初期に、未婚の少女たちを学校に通わせるという案が地域の党の幹部から出されたとき、ホールは武力抵抗を試みたのである。寸前で武力衝突は回避されたが、女性の教育プランはお蔵入りとなった。なぜそのようなことになったのだろうか？ある老人は次のように語る。

「われわれのところでは、女は結婚すると、夫の子供を産む。夫が死んで、他の男の子供を産んでも、夫の子供だ。われわれのところでは盲目の者でも、足が悪くても、結婚できる。兄弟たちが畑を耕したりウシの世話をしたりするのだ。シダーマの娘たちは誰とでも結婚する。子供を産むとどこへでも消えてしまう。そして別な男と結婚する。娘たちが教育を受けると、このようになってしまうだろう」。

高地人の女性は、結婚と離婚を繰り返し、一カ所にとどまることがない。ホールの女性のあるべき姿を定義するさいに、高地人女性の気ままに男

性の間を移動する姿が、その対抗イメージとして語られるのである。ホールにとって、女子が初等教育を受けるということは、とりもなおさず高地人の女性になることであり、集団の維持自体が不可能になる、というのである。

女子「割礼」は、女性の帰属を確定する最も象徴性の高い行為である。現在ホールの居住地域でも、地方政府＝シダーマは女子「割礼」を、遅れた悪しき慣習とみなし、廃絶の対象としている。だからこそ逆に、女子「割礼」はホールにとって、守るべき伝統とみなされるのである。

4 女性のジレンマ

女性に割礼について尋ねると、それは良き伝統であり、存続すべきものと答える。しかし私には、ホールの女性の割礼に対する態度は、ほんとうはより複雑なように思える。そしてホールが国家へと包摂されるに連れ、女性たちの伝統へのまなざしも、複雑になっているのではないかと思う。

たとえば、ある女性は私に、こう語った。「男たちは知らないだろうけれど、結婚のときに集まった女たちは、男は殺しの装束をつけている、今日は娘の喪の日だ、と言っているわ」。

こうした言葉は、女性たちが女子「割礼」という慣習に対してさめたまなざしを持っていることを示している。しかしそれだけではない。女性たちはその背後にある家父長制的な女性の交換のシステムに対しても、批判的なまなざしを注いでいるのではないかと思うのである。

ホールの女性にとって、「割礼」は少女の死を意味する。しかしそれが「死」であるのは、「割礼」が少女時代と成人女性の生活史を分断する象徴だからである。そしてその連続性の分断が、ホールの女性に強い精神的な葛藤をもたらす。ふつうホー

ルの婚姻は、親同士の交渉によって決められる。少女には、自分の意思を介在させる余地はほとんどない。

ホールの若者はたいてい、結婚前に「恋人」(kaim) をもっている。しかし、婚姻が親による取り決めによってなされる以上、少女は葛藤に陥いる。少女は望みもしない男と結婚させられるかもしれないし、相手が自分の祖父の世代にあたる老人であることもある。

恋人と結婚するためには、彼を自分との結婚という大事業に踏み切らせねばならない。しかしどのようにして彼をつなぎとめておくことができるだろうか。ホールでは結婚前に妊娠することは厳格に禁じられているので、関係はふつうキスまでである。しかし相手が性交渉を求めてくることもある。もし拒めば、恋人は自分から去るかもしれない。しかし妊娠すれば、自分がホールから追放されてしまう。少女はダブル・バインドに陥ることになる。ここで問題となるのは、「割礼」という身体的な加工をとまなう儀礼自体ではない。むしろそれに象徴される家父長的な権力と、そのなかでジェンダーに割り振られた主体性のありかたである。

女性たちが自らの置かれた立場をどのように考えているのかは、アヤナという憑依カルトの伝播から推測できるのではないかと思う。

アヤナという精霊の信仰は、1960年代にホールに入り、社会主義政権時代に弾圧を受けつつもホールの中に広がっていった。現在アヤナに帰依している人々の8割以上は女性である。アヤナのネットワークは、クランやリネージを横断して形成されており、女性たちの交流の場となっている。

アヤナの霊媒になっている人々は例外なく、まずはじめにアヤナに憑依され、病に伏す。その後には儀礼的な治療を受け、憑依した精霊と儀礼を通

して交流できるようになるのである。私のインタビューした霊媒のおよそ半分は、アヤナに初めて憑依されたのは、結婚前だと答えた。そしてそのうちの何例かは、明らかに結婚にまつわる葛藤が、憑依の原因だった。

現在アヤナの儀礼もアードとよばれ、これまでの伝統と並存している。しかしアヤナの儀礼で興味深いことは、それがホールの忌み嫌う高地人の儀礼をそっくりと模倣している点である。降霊儀礼に用いられる儀礼用具は、高地人のコーヒーセレモニーに用いられるものの転用である。またアヤナへの供物は、石鯨や焼酎、金銭や綿織物など、外部から近年もたらされたものばかりである。そして憑依する精霊は、高地人や外国人であり、彼らはエチオピア国旗や洋服を身にまとい、馬に乗り、車に乗り、飛行機に乗ったりして飛来する。これらはいずれも、ホールのアイデンティティを侵すシダーマの象徴にほかならない。

家父長制的な制度からの自由をもたらず精霊は、ホールが自らの伝統的社会のありかたを考える際に対抗的なイメージとして用いる、高地人たちの姿をとっているのだ。

5 結 論

この報告では、女子「割礼」の存続を、支配的な高地人文化への抵抗という文脈で解釈した。ホールは圧倒的な力を持つ高地人文化と向き合ったときに、女性の交換にもとづく婚姻のシステムを、

注意深く伝統の中に隔離しようとしたのではない、というのが私の解釈である。女子「割礼」は、その中でも最も象徴性の高い部分をなしている。離婚を繰り返す高地人の女性というイメージは、割礼を引き受けることで帰属を明確にするホールの女性を明示するための対抗的なイメージとして用いられている。

しかし女性の置かれる立場は矛盾をはらんだものである。正当なホールの女性となることは、自らの主体性を放棄することで成り立つ。それは彼女たちをしばしば葛藤に導く。そのような中で急速に広まった精霊の憑依カルトは、彼女たちを閉じ込めるさいに用いられた対抗イメージをなす、高地人文化の模倣という形をとったのだった。

アヤナの憑依カルトは、近代化とアイデンティティのゆらぎを、その儀礼の語彙の中で直接語っている。しかし女子「割礼」も、このような危機と無縁な伝統的慣習として存続しているわけではない。女子「割礼」は女性たちを「伝統＝われわれ」の世界に隔離することで、侵入する「国家＝高地人」の世界から集団を分節し、アイデンティティを維持するための装置となっている。女子割礼の存続もまた、裏側からホールの置かれている近代化とアイデンティティの危機について語っているのである。

女子「割礼」もつ意味は、ジェンダーとエスニシティ、伝統と近代化、アイデンティティの維持と変容といった、いくつもの問題の交叉する点においてこそ、とらえられなければならないだろう。

(みやわき・ゆきお／大阪府立大学)